

令和2年度 山形市立第三小学校 校内研究の概要

1 学校教育目標

ともに学び、豊かなくらしをつくる子ども

・ ㊦ころ豊かに・ ㊧なびを高め・ ㊨らし広がる・ ㊩わやか三小

2 研究の概要

(1) 研究テーマとめざす子どもの学びの姿

①研究テーマ

ともに学び、豊かなくらしをつくる子どもの育成（12年次）
～ 子ども理解から進める探究型学習 ～

②めざす子どもの学びの姿

㊦「主体性」 …… 自分の願いをもち 学び続ける子ども
㊧「協働性」 …… かかわりながら ともに学ぶ子ども
㊨「創造性」 …… 学んだことを 生かそうとする子ども

(2) 研究の理念とテーマ設定

社会的な背景から

これから先の時代は、「厳しい挑戦の時代」である。一人一人の多様性を原動力とし、新たな価値を見出していくことが必要となってくる。子どもたちには、こうした変化を乗り越え、高い志や意欲をもつ自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り拓いていく力を身に付けることが求められる。新しい時代を生きる上で必要な資質・能力を確実に育てていくためには、「何を学ぶか」だけでなく、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要となってくる。さらに、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習やそのための指導方法を充実させていく必要がある。「生きる力」や「確かな学力」は21世紀の社会を生きる上で必要な力とされ、その育成が求められている。

研究の積み重ね

そのような社会的背景とともに本校では、子ども理解を基盤として「主体性」「協働性」「創造性」の視点で学びを展開し、学校教育目標に掲げた子どもの姿の実現に迫ろうと、これまで実践を重ねてきた。また、学習意欲や思考力、表現力、知識理解等にとどまらず、子どものもつ価値観や判断力、向上心等の子どもの内面にまで目を向けた教育を大切にしてきた。

子どもの実態と課題から

＜自分で決めて、自分の生活をつくる子どもをめざして＞

本校の子どもたちは「学ぶ」ことが好きである。新しい知識を得ることに喜びを感じ、じっくりと考え、物事の真理を見つけたときに目を輝かせている。素直でやわらかなずてきな子どもたちである。

そのような子どもたちを、これまでの実践と社会的な背景に照らし合わせると、次のような課題が見えてきた。

- ◆各自が課題意識をもち、見通しをもって学び続けること
- ◆多様な考えに触れて納得したり、感動したり、時には反論を交えたりしながら、自分の考えを広げたり深めたりしていくこと
- ◆より質の高いものを追究していこうとすること
- ◆授業で学んだことを、日常生活の中で意図的に活用すること

<学び続ける教師として>

教師は子どもの学びをコーディネートする存在である。そこで、授業をつくるための「教師の出どころ」についてさらに考えていく必要がある。そのために子どもを的確に理解する力（子ども理解）と、それをもとにした単元デザイン力（単元を構想する力）を付けるように意識する。

- ◆子どもの現状と課題を意識したカリキュラムの創造と見直し
- ◆子どもの学びの深まりを意識した単元の創造
- ◆主体的な学び、表現力を育む「総合的な学習の時間」の見直しと充実
- ◆授業研究会・研究協議会のさらなる充実

テーマについて

わたしたちは、一人一人の子どもが自己肯定感をもち、身に付けてきた資質や能力を発揮しながら、自らの願いを実現していくことができるように育てていきたいと願っている。子どもたちは、人や自然、地域とかかわりながら学び、仲間とともに学ぶ中で自分を見つめなおし、さらに高まっていこうとする力をもっている。互いに仲間を尊重し合う関係を育みながら、子ども一人一人が自信をもち、自分の願いの実現に向かって追究を続け、学んだことを生活に生かしてほしいと考え、本テーマを設定した。

めざす子どもの学びの姿

テーマに迫るため、めざす子どもの姿を次の三つの視点で考える。すべての教育活動を学びの場としてとらえ、子どもたちの育ちをとらえていく。この三つの視点はそれぞれが明確に分けられるものではなく、目の前にあらわれている子どもの学びの姿を価値付けて積み重ねていく。

「主体性」 自分の願いをもち 学び続ける子ども

- 子どもたちが学習問題や課題に対して解決の方法やねらいを明らかにし、願いや思いをもって進んで学ぶ姿をめざしていきたい。その過程や活動のあとに、新たな課題を見付け学び続けていく子どもを育てていきたい。

「協働性」 かかわりながら ともに学ぶ子ども

- 人は対象（人・もの・こと）とのかかわりを通して多くの知識を得たり、経験を積んだりしながら確かな力を身に付けていく。対象とかかわりながら、より質の高い豊かな学びを生み出すことができる子どもを育てていきたい。

「創造性」 学んだことを 生かそうとする子ども

- 学んだこととは、獲得した知識や技能（知的な側面）だけでなく、学習から得た喜びや自信など（情意的な側面）、さらには問題を解決するための「見方や考え方」、「学び方」も含まれる。これらを総動員して直面する問題を解決しようとする子どもを育てていきたい。

めざす子どもの学びの姿に必要な資質・能力

「主体性」「協働性」「創造性」は、これから生きていく子どもたちに育てていきたい学びの姿（行動目標）である。このような学びが子ども自身で実現できるようにするには、各教科等において、どのような資質・能力が必要になるのかを明らかにしなければならない。そこで、本校では、めざす子どもの学びの姿に必要な資質・能力を次のように考える。

◆学びに向かう力：学びを生活や社会に生かそうとすること

◆思考力・判断力・表現力：未知の状況にも対応できること

◆知識・技能：生活の中で生きて働くこと

これらの資質・能力は、各教科等に共通する汎用的なものであり、各教科等の特性を踏まえて具体的に設定しなければならない。

(3) 研究の内容と方法

探究的な学びにするための指導の手立て

本校では、めざす子どもの学びの姿に必要な各教科等の資質・能力を育成するために、日々の学習を、いかに探究的な学びにしていくか研究を進めてきた。つまりこれまで以上に、日々の授業で「主体的な学び」「協働的な学び」「創造的な学び」を展開することが探究的な学びにつながると考えたのである。これら3つの視点を、指導の手立てとして、授業改善を進める際の視点とした。

この3つの視点は、学習指導要領（H29年告示）第1章総則 第3の1「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」で示されている内容に合致すると捉えたい。すなわち、「主体的・対話的（協働的）で深い（創造的な）学びの実現に向けた授業改善（探究型学習）」と、本校で考える3つの視点である（ ）内の言葉で言い換えることができる。

これら3つの視点を展開するために留意したいことが2点ある。

1点目は、3つの視点が単独で展開されるのではなく、3つの視点を教師の指導過程として一体化したものと捉え、その過程を探究的にしなければならないことに留意したい。まずは、教師が子どもたちの①「主体的」な学びをひき出し、そこから、②「協働的」な対話重視の学びを促し、最後に、③「創造的」な深い学びへといざなう。①→②→③のプロセスは、何度も繰り返され、スパイラルに高まっていく。このようなプロセスで指導を展開することが、各教科等に共通した子どもたちの学びの充実につながると考える。

2点目は、「主体的」な学びをひき出すことを第一義と捉えたい。例えば、「協働的」な対話重視の学びを促そうとするあまり、子どもに必要感がないままに、ペアやグループでの学習を行うことがある。そうすると、「させられている」学習となり、子どもの主体性が育たない。子どもたちの「思いや願い」を大切にし、子どもの必要感をもたせることが大切である。

以下に、プロセスごとの学習活動のイメージと、そこで行われる具体的な教師の学習指導のポイントを示す。

① 「主体的」な学びをひき出す —子どもの学びの文脈を意識した指導—

児童に、伝えたいことがあることが前提であり、友達と一緒に解きたい問いがあれば、自分の考えを説明しようとする。

そのために、教師は子どもの発達や興味・関心を適切に把握し、子どもの考えとの「ずれ」や「隔たり」を感じさせたり、教材への「あこがれ」や「驚き」などを感じさせたりすることで、子どもの課題意識を高めてあげなければならない。

② 「協働的」な学びを促し —一人一人の気づきを生かせる指導—

考えは伝えあってよくなっていくという価値を共有し、自分の考えを説明すると、互いの考えの違いに気づき、自分の考えが更新していく。

そのためには、ペア学習やグループ学習が子どもにとって必要感のあるものに行わなければならない。物事の決断や判断が迫られる場面や多様な情報を手に入れる場面など、話し合う目的を明確にすることが大切である。

③ 「創造的」な学びへいざなう —見方・考え方を重視した指導—

違う考えを統合したり、自分の考えを振り返ったりすることを繰り返していくことで、よりよい考えに高まったり新たな課題が生じたりする。

そのためには、子どもが各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ることが必要である。

育成すべき資質・能力を基にした子ども理解	<p>学ぶ主体である子どもの思いを大切にしたい授業を実践したり、個に応じた支援の方向性を探ったりするためには、深い子ども理解が必要である。</p> <p>子どもの個性は、これまでの環境、他者とのかかわり、学習経験などによって育まれている。それらをありのままに受け止め、一人一人に応じたハードル（課題）を設定し、さらに育んでいきたいと考える。授業を計画する際には、子どもの思いや願いを探ったり、思い浮かべたりすると共に、各教科等で育成しなければならない資質・能力を明確にして単元の構想をしていきたい。授業を進める中で、教師は子どもの思いに寄り添い、子どもの実態や支援のありようをていねいに記録し、多くの目で語り合っていきたい。</p>
資質・能力と学習内容を加味した学級カリキュラム	<p>めざす子どもの学びの姿からカリキュラムマネジメントを進める。作成の際には、学習内容だけでなく、その学習内容を通して付けたい力（学習の基盤となる資質・能力）についても明らかにしなければならない。年度途中で子どもの学びと育ちを振り返り、随時修正を加えたり、学習内容を入れかえたりしていく。このカリキュラムマネジメント表は、学習活動を想定したり、指導の方向性を考えたりする資料としても活用していく。</p>
研究の窓口	<p>今年度は「全教科」を窓口とし、各教員が研究教科を選択できるようにする。</p> <p>各教科の「見方・考え方」をどのように働かせて学習活動を仕組んでいくかを軸に、授業改善に取り組んでいく。</p>
授業研究	<p>授業づくりは、その過程（単元構成）と本時（参観）、そして事後研究会（授業リフレクション）をひとつのパッケージと考えて実践していく。研究授業を参観した教師が、それぞれの視点で学級の子どもたちに還元していくことをねらっている。</p> <p>事後研究会では、子どもの学びと教師の手だてについて共感的に振り返る。そのために、詳細な授業記録をとり、教師の意図や子どもの思いをとらえながら話し合いを進める。自分がとらえた子どもの姿を語り合う中で、学びのある事後研究会を計画していく。</p>

3 今年度の重点

①見方・考え方を働かせて学ぶための指導の手だての工夫

- まず、その単元で何ができるようになるか、授業のゴールイメージを教師はもっているだろうか。子どもは今まで何ができている、そして単元を終えて、何ができるようになっていけばいいかを、能力ベースで教師が描くことが、単元作りのスタートである。そのためにも、各教科の系統性への関心を高めていきたい。
- 次に、その学びのゴールに向かうために、子どもはどのように学んでいくか（子どもの学びの文脈）を考えていくことが重要である。その際、1 単位時間をどうするかではなく、能力ベースの単元デザインをどう描いていくかを大事にしていきたい。
- 三小では、学びを主体的・協働的・創造的の3つの視点で捉えている。

- ・ 主体的な学び＝子どもが誰かに自分の考えを伝えたいという学び
- ・ 協働的な学び＝子どもが互いの考えの違いに気付く学び
- ・ 創造的な学び＝子どもが自分の見方・考え方を発展させていく学び

この3つの視点に対して、それぞれ3つの指導の手だてが必要であるというわけでない。なぜなら、見方・考え方を働かせた学び（創造的な学び）をすることで、子どもは誰かに自分の考えを伝えたいという（主体的な学び）ことがあるし、自分の考えを伝える学び（主体的な学び）をすることで互いの考えの違いに気付く（協働的な学び）こともあるからである。つまり、この3つの学びの視点は一体化して捉えることが重要である。

- 前年度に引き続き今年度も、子どもはどのように学んでいくか（子どもの学びの文脈）を考えていく上で、「見方・考え方」をキーとしていく。見方・考え方とは、その教科特有の対象への着眼やアプローチの仕方である。子どもは就学時にはすでに、曖昧な知識だったり素朴概念と呼ばれる膨大な知識だったりをもっている。少なくとも、小学校で教える事柄であれば、子どもはそれに関わる何かしらの知識や経験をすでにもっている。その子ども達も持っている「いい線はいつているが、不正確であったり断片的であったり直観的であったりする知識や経験」を、各教科ならではの対象とのお付き合いの仕方（＝見方・考え方）に沿って、洗練させたり、統合していけるよう促したりするのは、教師の役割である。教師が漫然と指導していたら、子どもの見方・考え方を磨くことはできない。その際、子どもの既有知識や経験を導入だけに使うのではなく、それで1時間、あるいは単元全体を学び進めていけるように授業をデザインしていくことを心掛けたい。
- そこで今年度は、見方・考え方を働かせた学びの具体として、各教科の教科目標を逆読み（③→②→①）で捉えることを大事にしていく。（以下の図）そして、事前研ではその視点で学びの根っこの部分の検討を充実させていきたい。

③資質・能力（見方・考え方の成長と自覚）どんな資質・能力を身に付けるか？



②学習活動（学びのゴールへのプロセス）どんな活動をしていくか？



①見方・考え方（教科特有の対象とのお付き合いの仕方）対象にどんな関わり方をしていくか？

②学習の基盤となる資質・能力を基にした学習活動の設定

- 「ある目標を達成させるために、ペアでの話し合い活動をしようと思うが、そもそもペアでの話し合いが上手いかない。」とか「複数の資料を読み比べて、子どもの考えを深めようと思うが、そもそも複数の資料を読み比べることが子どもはとても苦手だ。」など、学習を進めるにあたって、クラスの子どもにつけたい資質・能力は、子どもの実態に応じて違いがある。そして、そのような資質・能力は、1単位の授業だけで身に付くものではなく、長期的・計画的に、そして教科横断的に育てていく必要がある。
- このような、自分のクラスに必要な「学習の基盤となる資質・能力」をどのように育てていくかを、教師は普段意識できているだろうか。長期的・計画的にということはいつか育つだろうと待っていることではない。どの学習でどうやって、その学習の基盤となる資質・能力を育てていくかを継続的に考えていくことが重要である。
- そこでまずは、クラスの子ども達の実態から学習の基盤となる資質・能力を具体化する。「言語能力」「情報活用能力」「問題発見・解決能力」「学校の実態を踏まえた資質・能力」を基に、学習の基盤となる資質・能力を学期ごとにクラスで設定する。そして、その資質・能力を日々の授業の中で長期的・計画的に、そして教科横断的に育てていけるようにカリキュラムマネジメントをし、どんな学習活動を設定していくかを工夫していく。

上記の今年度の重点に基づき、指導案の形式を以下のようにする。

指導案1枚目の右半分には、①見方・考え方を働かせて学ぶための指導の手だての工夫、の重点に基づき、その教科（単元）で何ができるようになるか（＝資質・能力）と、見方・考え方を働かせるための指導の手だてを書くようにする。

そして、指導案1枚目の左半分には、②学習の基盤となる資質・能力を基にした学習活動の設定、の重点に基づき、学習の基盤となる資質・能力と、その資質・能力を育むための学習活動の設定を書くこととする。

また、指導案作成に充てる時間よりも、授業づくりに充てる時間を十分にとることができるように、指導案自体の文量を抑え、内容を精選した指導案の形式とする。